

古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第Ⅲ章 到来した稲作がもたらした歴史の展開

「蝶の雑記帳 130-3」

第Ⅲ章 到来した稲作がもたらした歴史の展開	79
i. 稲作の九州島内での拡大と社会の発展速度	79
ii. 日本列島での稲の東進と北進	85
iii. 太陽の道という観念は水稻栽培によって生まれた	93

第Ⅲ章 到来した稲作がもたらした歴史の展開

水田稲作が到来して日本列島の人々の暮らしは大きく変化し、社会は新しい発展の道をたどるようになった。その概観を適切にとらえる努力をすることは倭国の歴史をよく理解するために大事である。第Ⅱ章で長々と稲の伝播を中国や朝鮮半島の古代史にからめて考えたのはそのためであった。問題空間をつくり出すことをめざすこの第一部では年代をできるだけ概数で表現するようにしているが、列島内での水稲栽培の伝播と各地域社会の発展を粗くイメージするこの第Ⅲ章では、大まかな時間軸を得ることができるよう時代区分に踏みこみながら考察しよう。それがたたき台としての倭国の歴史の素描となることを期待して。

i. 稲作の九州島内での拡大と社会の発展速度

水田稲作がどのようにして歴史に記されるような社会へ発展させたか、素朴な考察から始める。九州北岸で稲作が始まったとき、どの地域が社会を大きく発展させる条件を具えていたか、第Ⅰ章で考えた図Ⅰ.5と図Ⅰ.6の地形図を眺めてみよう。すると、菜畑遺跡の発見された唐津市などよりも、板付遺跡のある福岡市とその西の糸島市が九州北岸でも広い平地をもつ地域であり（詳細な地図を見れば北流する川が幾筋もある）、後背地として南の筑後川流域と佐賀平野につながってさらに発展する条件を具えていることが分かる。第Ⅱ章で見たように、^{もみ} 籾をもって移動し水田造成をして人口と耕作地が大きく増大するには年月のかかる多大な労力を必要とするが、現代の福岡市とその周辺地域を含む領域は、九州島の中でも、耕作民の増加と耕作地の拡大を許す好条件を具えていた。社会の発展はまた中心地が交通の要衝であることも必要条件とする。福岡市周辺領域は古代の稲作社会が大きく発展するそれらの条件を、九州島の中で最も具えていたのである。だから、福岡市周辺と糸島市で、板付遺跡以来の弥生時代の稲作民の集落群が大きな社

会へ発展したという歴史理解は、ほとんど必然的に思われる。

地形と地理が水稻栽培農業を基盤とする社会の発展を条件づけると考えるこの大局観は、その後の日本列島西部への稲作の拡大を考察するのに役立つだろう。

日本の考古学者は、— 列島西部の古代人は、一つの沖積平野で栽培に成功すると、草分けがさらに東の沖積平野へ行くというふうにして進んだ — と考えている。¹⁴C による遺跡の絶対年代の測定を始めた国立歴史民俗博物館は、九州北部で BC900 年代に始まった水田稲作は、おおよそ 800 年くらいかけて日本列島を東漸した、という考えを提出した。福岡から関東地方まで約 1000km を移動するのに 800 年程度しかかからなかったことになる。これを、稲が長江下流域から淮河流域の北まで南北約 200km を移動した年月おおよそ 3000 年 (河姆渡遺跡の BC5000 年から殷の成立よりも前の BC2000 年ころまでと仮定して) にくらべれば、北上よりも東進が容易だったことが分かる。栽培法の進歩を考慮に入れたとしても、ずいぶん早く移動したと言うことができる。

日本列島で稲の移動にかかった年数についての推定値の精度は、¹⁴C による遺跡の絶対年代の測定がそれまでの土器編年による弥生時代開始の推定年代を 600 年もさかのぼらせたあと、各地の稲作遺跡の絶対年代を ¹⁴C 年代測定法によって整合的に整理し直す作業が十分綿密に実施されたかにかかっている。

このことについて、社会科教科書の出版社帝国書院のホームページは次のように書いている。教科書は学界の議論を観察してタイムラグを伴いながらある程度安定した共通了解を採用するから、それを見るのは有用である。

弥生時代については、紀元前 3 世紀ごろから紀元 3 世紀ごろまでの 600 年間ととらえています。その一方で、この記述に注釈をつけて、弥生時代の

はじまりを紀元前 10 世紀とする新しい研究成果も紹介しています。これまで通説となっていた、「弥生時代のはじまり＝紀元前 300 年」は、1960 年代に、土器編年(土器を各地域ごと、各型式ごとに前後関係に分類・整理し、年代順に配列すること)や遺跡から出土した中国の青銅器をもとに割りだされた年代に、弥生前期のコメや貝を炭素 14 年代法(遺物の中の炭素の放射性同位体である炭素 14 の量から年代を推定する方法)で測定したデータ結果を加味して出された説でした。2002 年、弥生時代のはじまりを紀元前 10 世紀ごろであると発表したのは、国立歴史民俗博物館(以下、歴博)です。歴博は最新の AMS-炭素 14 年代法などによって測定した結果、九州北部の弥生時代遺跡から出土した、土器に付着する炭化物(コメのおこげ)や木杭は、紀元前 900～800 年のものであり、紀元前 10 世紀後半に九州北部で本格的にはじまった水田稲作が、約 800 年かかって日本列島を東漸したとの説を展開しました。水田稲作が九州北部から各地に広がるのに要した年月は、例えば瀬戸内海西部地域までで約 200 年、摂津・河内までで 300 年、奈良盆地までで 400 年、中部地方には 500 年、南関東には 600～700 年、東北北部には 500 年であると推定されますが、水田稲作が、きわめてゆっくりと各地に広がっていったことが、ここから分かります。

こうしてみると、従来のように「弥生時代のはじまり＝紀元前 300 年」などと、ある一点で区分すること自体、無理があると思われますが、教科書本文では、通説に従った紀元前 300 年と記述し、注釈で紀元前 10 世紀という説を示しました。これは現時点では様々な議論があり、また地域によって差があることを踏まえた記述であることを、ご理解いただきたいと考えております。

他方で、Wikipedia は第 I 章第 iii 節で注目した弥生時代の吉武高木・須玖岡本・三雲南小路遺跡の三つについて、慎重に具体的な年代を記さない。これに対し、福岡市のサイトは吉武高木遺跡について約 2200～2000 年前、春日市のサイトは須玖岡本遺跡を弥生時代中期～後期、糸島市の三雲南小路遺跡の看板は弥生時代中期末(約 2000 年前)と書き

ている。こちらは、ほぼ以前の土器編年に基づいていると見える。

たくさんある弥生遺跡の年代についてわれわれが目にする状況は以上のようなものである。¹⁴C年代測定法による信頼できる年代測定がまだ不十分で、近距離にある遺跡の前後関係に見当をつけることはできても、遠距離にある多くの遺跡について比較考量するには時間がかかるだろう。厳格に考えれば、十分確実な年代を体現している出土物の少ない時代の遺跡の推定絶対年代は、定説と言えるほど確定したものではないと言わざるをえない。→古墳時代→弥生時代とさかのぼるほど倭国史の科学的な議論がむずかしいことが判る。

それでも、粗くてもたたき台となる議論を開始するために、「弥生時代の陸の太陽の道」上の三つの遺跡について各市の教育委員会が説明している年代を参考にして、仮に、吉武高木遺跡を約 BC200～AD0 年ころ、三雲南小路遺跡を AD0～200 年ころ、須玖岡本遺跡を AD0～300 年ころとしておこう（この仮の数値はまだ、以前の土器編年で弥生時代を BC300～AD300 年として、おおざっぱに前期・中期・後期と三期に分けたところの名残をとどめているが）。そういう仮説的な見方で、稲作が西日本西部にどのように拡大普及したかを考えてみよう。

概説書⁽²⁵⁾で藤尾慎一郎は、九州北部で始まった水稻栽培が九州島から出るのに 250 年余りかかったと言っている。帝国書院の教科書のまとめと少しくいちがうが、九州北部の稲作について ¹⁴C による年代測定法による研究を主導した藤尾の見解を尊重すべきだろう、とわたしは考える。それは、前章の議論からして、九州北岸に到着した稲は出発地とほぼ似た気候とはいえ細部で異なる自然環境に適応するのに時間がかかり、移民者たちはそれほど湿潤・広大でない平野で新しい自然環境に対応する工夫をしなければならず、多数派の先住民を稲作に参加させて統合的な社会を築いていくのにも長い時間がかかっただろうからである。そういう動きが進展して人口が増加し耕作地が拡大するのに、

図Ⅰ.6 の現在の福岡市周辺と糸島市とさらに南の筑後平野と佐賀平野には水田開発に適した平地が十分にあって、そこを造成開発するのにかなり長い年月を要しただろうと考えられる。九州島全体に稲作が広がるにはさらに年月がかかったはずである。だから、到来した稲が 250 年くらい経って九州島から出て東に向かったという考古学的な見解に反対する理由はないように思う。

ところが、水稻が東進を始めたあとも、図Ⅰ.6 に示される列島での稲作開始地域の社会は、文明化の点で継続的に大きな発展をとげた。大陸に近く地理的な好条件に恵まれたその地域で、先ほどの仮説的年代設定で考えると、初期板付遺跡の段階から、最初の王墓と目される吉武高木遺跡の段階に至るのに 600 年以上かかり、さらに弥生時代の盛期を実現した須玖岡本遺跡の段階に到達するのに通算 1000 年はかかったのである。この年代観は以後の考察においても重要である。九州でのモデルを持って行くのだから、九州から出て東進した人々が移住先で社会を築くのに、九州ほどの年月はかからなかっただろうが、先進地域の九州北部に追いつくには長い年月を要したと考えなければならない。このことはすでに前章の中国のところで学んだことである。

上で考えたことを念頭において、九州北岸で始まった稲作が日本列島西部でどのように拡大普及したか、次ページの図Ⅲ.1 を見て概括的に把握しておこう。標高を加味した傾斜度地形図である図Ⅲ.1 は、水田の造成に適した平野がどこにあるかを教えてくれる。まず分かることは、水稻が最初にやってきて定着した九州島の北部が、この地図に含まれる西日本のなかで水稻栽培に最も適した地域だったことである。日本の水稻栽培文明がまずそこで開花し、高い水準にまで発展した理由がよく理解できる。

ただし、この地図で紫色に描かれた標高の低い海岸近くの地域は、河



図Ⅲ.1 西日本の標高を加味した傾斜度地形

川からの土砂の堆積により、またのちには干拓によって広がったところである。福岡市と糸島市の海岸部・筑後川下流域と佐賀平野の海岸部がそうである（吉野ヶ里遺跡はかつては海に近かった）。吉備地方（倉敷・岡山）も児島という地名がその北側が海だったことを教える。大阪平野にもかつては河内湖があった。濃尾平野も三つの川の運んだ土砂で広がったはずである。おそらく出雲の宍道湖周辺でも平地が広がったと考えられる。図Ⅲ.1 を見るときには紫色の相当の部分を引き引いて考えなければならない。

図Ⅲ.1 はもう一つ重要なことを教える。九州より東で名を上げた吉備の平野・出雲の平地・大阪平野・濃尾平野（と伊勢-三河地域）に、奈良盆地と北陸の平野などを加えれば、それらが西日本でも有数の水稲栽培に適した地域であることが分かる。『日本書紀』にそれらの地名が登場することが納得がいく。つまり、地理と水稲栽培という参照軸をもつ問題空間で眺めれば、九州島とその東の平地の多い地域が倭国の

歴史上重要な地域であった理由が判明する。

ii. 日本列島での稲の東進と北進

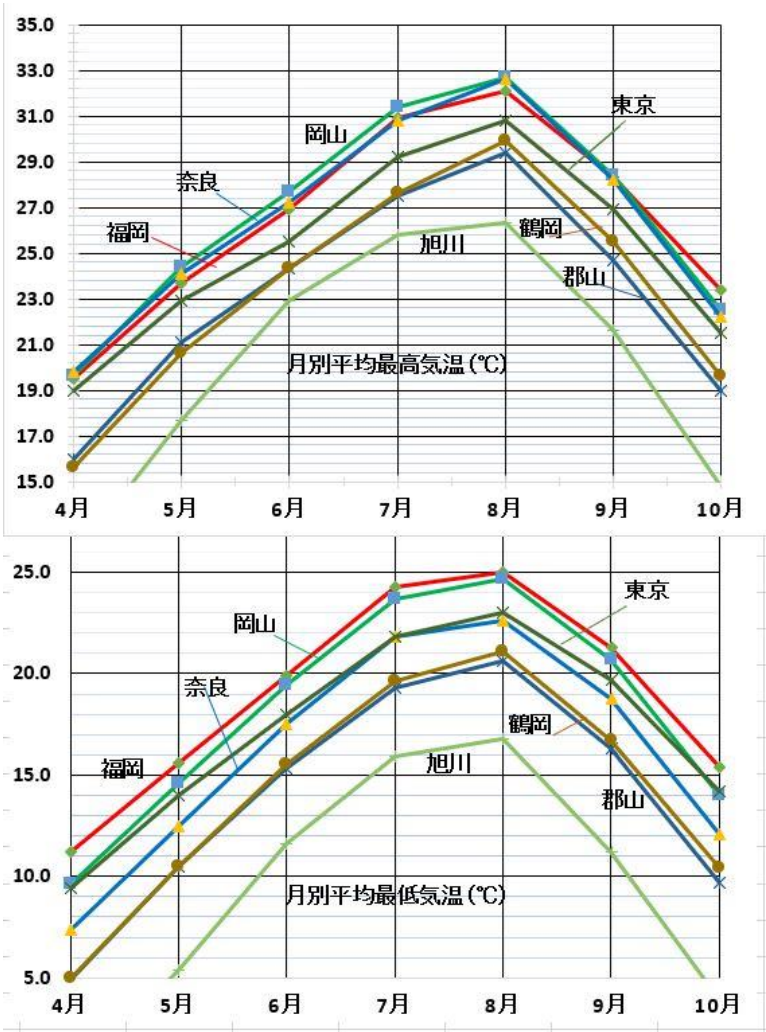
それでは、稲が東進するのにそれらの各地の気候がどのくらい影響したかを、また気候データに注目して考え始めよう。この議論は前著⁽¹⁴⁾でしているので、本書では要点だけを述べる。図Ⅲ.2 と図Ⅲ.3 は、各地の気温と降雨量をそれぞれ一つのグラフに集成したものである。稲が北進することになった東北地方と北海道は倭国史の範囲では重要ではないが、稲がどのような困難を克服して伝播したかの点で省略できないほど重要である。それにはおしまいの方で簡単に触れよう。

稲が九州島を出ていくころには、移民者と先住民との婚姻関係が広がって人種的な区別は失われたと考えられる。歴史上それに反する伝承は明らかになっていない。それでも、移民者の（おそらく男系の）家系という見方は残って、そういう家柄の人物が優位な地位を占めることはあっただろう。人々の人種的な融合が進んで、稲作に関する語彙を中心に海外から来たことばを別にすれば、言語上でも多数派の先住民の言語が支配的になったと考えられる。そういう事情から、九州島と外との交流は困難ではなく、稲が外に出ていく条件は整っていただろう。だが、水稻栽培は季節に合わせての水の管理などノウハウの点で、籾をもらった外部の人が容易に成果を上げることはむずかしい。だから、稲はやはり、おもに移住者に頼って東進したと考えるのが順当だろう。

首都圏の人は九州と聞くと南の方と思いがちのようだ。ところが、日本列島の関東以西はどちらかと言えば東西方向に横たわっていて、福岡と東京の緯度は 2 度あまりしかちがわない。図Ⅲ.1 が示す範囲では緯度の差はもっと少ない。ケッペン気候区分を見ても、北陸と山地を除けば、関東以西の気候が同じ気候区に属することを教えてくれる。九州北部で定着した栽培稲は、珠江中流域で生まれてまもなく下流域の広州

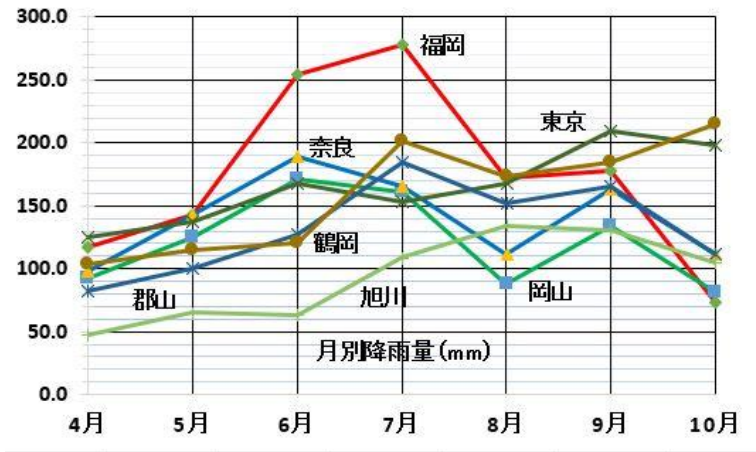
へ東進したときの体験をくりかえすことになった。

東進を始めたイネの主要な航路だっただろう瀬戸内海沿岸をまず進んでみよう。前著⁽¹⁴⁾では大阪の気候グラフを示したが、瀬戸内海沿岸の



図Ⅲ.2 日本各地の月別平均最高最低気温

気候は全体的によく似ているので、本書では中央部岡山の気候グラフに代表させてそれを福岡とくらべよう。図Ⅲ.2 の月別平均最高・最低気温グラフが、稲作期間を通して岡山市と福岡市でほぼ等しいと告げる。瀬戸内海気候では雨が少ないと言われるので、図Ⅲ.3 でそれを調べると、たしかに8月には少ない。しかし、川筋の多いそこで水路を整備するなどして何とかなったのだろう。稲が到来した瀬戸内海の各地で水稲栽培は順調に定着していった、と考えることができる。



図Ⅲ.3 日本各地の月別降雨量

九州北部から瀬戸内海を行くとまず周防灘がある。海路を進む移住者（おそらく血縁関係の近い数家族）はそれぞれの場所で適地と判断する場所を選んだだろう。ところが図Ⅲ.1 を見ると、最初に出会う水田造成に適するわりあい広い平地は伊予（愛媛県）にある。考古学的な研究で瀬戸内海の稲作で伊予が年代的に早いという傾向が見られるというが、図Ⅲ.1 の地形はその理由を説明する。伊予の平地は遺跡に痕跡を残すほど広くて発展する条件を備えている。

上で先に言及したが、伊予の次の適地が吉備だったと思われる。のち

の歴史を見ても、吉備には児島の北の内海周辺と後背地に水田を造成するのに適したかなり広い土地があって、しだいに大きな生産量を誇るようになった、と推測することができる。

こうして、福岡市周辺で成功した栽培稲は、最も影響を受ける気候という生育条件にあまり苦勞せずに、瀬戸内海を→岡山→大阪へと東漸したと推定できる。しかし、移住者たちはそんなに急いで東に進む必要はない。それぞれ選んだ土地で一族の生活を安定させることがまず大事なことである。だから、藤尾慎一郎が指摘するように、稲は、瀬戸内海を東進するとき途中の適地を順番に開発するようにして進んだのだろう。そうすると、稲が瀬戸内海に出て大阪湾に到着するまでに 300 年以上かかって不思議ではない。

そう考えると、奈良盆地で稲の栽培が始まったとされる唐古鍵遺跡の年代を BC500 年代とする見積もりは早すぎるかもしれない（板付遺跡の BC900 年代から 400 年しか経っていない）。図Ⅲ.2 で九州北岸や瀬戸内海沿岸の気温と比較すると、稲作期を通じて、月別平均最高気温はほぼ等しいが、月別平均最低気温は 2 度余り低い（釜山と同程度に低い）。奈良盆地では夜の冷え込みが大きいのである。そこに来た稲には夜の冷え込みがきつく、水を湛えて保温することが必須だっただろう。ちなみに、図Ⅲ.3 は奈良の降水量が岡山よりも多いことを告げる。ともかく、奈良盆地ではしばらく収量が少なかったと考えられ、稲が適応性を獲得して大阪平野に匹敵する収量を上げるのに年月がよいにかかった、と考えられる。

こういうふうには実際には、気温は土地ごとに異なる。降水量は、突出している福岡を除き、関東地方まで稲に阻害要因にならなかったと考えられる。稲が盛んに生育する 7・8 月の降雨量は、日照時間と関係するから、東北以西で郡山や鶴岡ほど多くないことがかえってよいのかもしれない。いずれにせよ、瀬戸内海を足どり早く移動した稲も、行っ

た先の気候によっては苦勞した、と考えなければならない。奈良盆地や琵琶湖の東の山を越えて濃尾平野に出るのにも、稲には苦勞があっただろう。

稲が関東平野まで行きつくのに年月がかかったのが当然なことが、図Ⅲ.2 のグラフから理解できる。東京の月別平均最高最低気温は、稲の栽培期間を通じて福岡や岡山よりもほぼ 2 度近く低いのである。第Ⅱ章で見たように、稲の生育条件上、釜山から福岡へ移住するのが困難だったとすれば、東海道を東に進んで関東平野に出ても適応性を獲得するのに年月を要したはずである（関東平野の内陸部の気候条件は稲にとって沿海部よりも厳しい）。関東での初期の稲作遺跡が年代的にわりあい早いとしても、栽培者たちが一定の収穫を上げて定着するには時間がかかったと考えるべきである。人口が増加し耕作地が拡大して首長のいる中規模の社会ができるにはさらに年月がかかっただろう。

稲は船に乗って人が思いがけないほど遠くまで行く。九州北岸から日本海沿岸へは対馬海流が運んでくれる。弥生時代の遺跡として有名な土井ヶ浜遺跡は長門二見の夫婦岩のすぐ北にある。西の響灘の方を見るかのように砂丘地に埋葬されていた人々の遺骨の身長は、縄文時代人と区別できるほど高い⁽³⁷⁾。九州北岸で稲作を始めた人々の形質がまだ色濃く残っている世代だと考えられている（中国大陸の古代人の形質との比較研究がなされている）。第Ⅰ章で考えた長門二見夫婦岩と沖ノ島を結ぶ東西線「太陽の道」という観念は、春分秋分の知識のあるこの地域の先進的な弥生人たちによって生み出された可能性が高い。土井ヶ浜遺跡北の油谷湾を北側から囲う小さな半島の弥生遺跡からは有柄銅剣が出土している（これまで九州で数本しか見つかっていない）。これらの遺跡は日本海側の物流の中継地と考えられている。

稲は出雲へ早く到達したと考えられている。ただし、本書では示さないが、出雲の稲作期の月別平均最低気温は奈良盆地よりもわずかに低

い。だからここでも、稲がその地で適応性を獲得するのに年月がかかったと考えるのがよいだろう。しかし、『記・紀』の神話の語ることからすれば、出雲はわりあい早く発展して大きな勢力をもつ社会が形成されたのだ。

日本海をさらに東に進めば北陸に至る。北陸はケッペン気候図ではここまで考えてきた領域と異なる気候区とされる。しかしそれは冬季の寒さと雪のせいで植生が異なるからである。だが、稲作を行なう期間その気候は関東地方とあまりちがわない。北陸も年月が経てば稲は適応性を獲得し、のちに『日本書紀』が継体王の出身地とするような稲作地帯となった、と理解してよい。

稲が行った思いがけないところとは現代の青森県である。弘前市周辺の砂沢遺跡と垂柳遺跡の発掘調査は、稲が早くも BC300 年ころには本州北端部に到達したと言う。水田跡が見つかり、そこで水田稲作が行なわれたと考えられている（帝国書院のホームページが九州北岸を出た稲が 500 年くらいで東北北部に到達したと書いているのは、この二つの遺跡のこと）。考古学者は、砂沢遺跡で水田稲作が行なわれた期間は短く十数年と見積もって、「そのころは気候が乾燥・温暖で安定した時期で、稲作を行なうのに不都合でないにもかかわらず、短い期間で終わった」と感慨を述べている。しかし、この推測が成り立ちがたいことは前著⁽¹⁴⁾で述べた。弘前市の月別平均最高最低気温と降雨量は、次に論じる郡山や鶴岡よりももっと稲の生育にきびしいのである。江戸時代の弘前藩の石高は大きくなくて当初四万五千石だった。砂沢遺跡で稲作が試みられてから 1900 年経ち、やっとその石高に相当する人口を養うことができるようになったのである。それでも、稲が十分な適応力を獲得していなかったことは、飢饉が何度も起き天明の飢饉では弘前藩の住民の 1/3 が餓死したことが教える。

図Ⅲ.2 と図Ⅲ.3 のグラフが、福岡とくらべると、郡山と鶴岡の月別

平均最高気温が 2 度強低く、月別平均最低気温は 4 度くらい低い、と宣告する。降雨量も 7・8 月に多く日照時間に影響したかもしれない。東北地方の入り口にある郡山と鶴岡でそうなのだから、稲が東北に入って行ったとしても、適応性を獲得するのに東北以南よりもはるかに長い年月を必要としたのは明らかである。

稲が低温に適応するために獲得した遺伝子形質について補足しておこう。井澤毅の論文^(38,39)が、光周性すなわち昼間の時間（日長時間）の長短が植物の生育に影響するしくみを教える。それによれば、九州～関東北陸・東北・北海道の三地域で栽培されている稲で、光周性花芽形成に関係する遺伝子が異なるという。稲は、日長時間の変化から花芽形成の時期を調節することができるが、遺伝子がそのしくみを担っている。日長時間が短くなっていることを知って花芽を形成するのに、時期が遅れすぎると冷温のため結実しない。東北以南に適応した光周性花芽形成関連遺伝子をもつ稲を東北地方にもちこんでも、より冷温な秋が東北以南よりも早く来るので、花芽をつけるタイミングが遅すぎて結実できないのである。これが、イネが北進するときの冷害の要因の一つとなる。イネがさらに北の北海道に渡ったときも同じ問題に直面したという。

北半球では、日長時間は初め増加して夏至で最大になると今度は減少していく。植物の光周性はこの物理現象に対する反応である。生育に影響する気温は、地表に供給される熱量の収支によるが、供給される熱量によって地表が温まるのに時間がかかるから、おおざっぱに言えば、月別平均気温のグラフはおおよそ 50 日遅れて月別日長時間のグラフを追いかける。稲の遺伝子は、比喩的に言えば、日長時間を観測して気温の変化を予測しようとしているのである。

もう一つ述べるべきことがある。第 II 章で考えたこと、DNA 鎖中の RM1 型 8 種のうち、日本列島には RM1a・RM1b・RM1c 型の 3 種が来たのに対し、朝鮮半島には RM1b 型を除く 7 種がある、という問題である。佐藤洋一郎の著書⁽²⁹⁾に示された図は、冷温耐性の獲得において RM1a 型が RM1b 型よりも優位だったことを教える。標本数が少ないけれども、その図は、東北地方には RM1a 型

が多いことを示している。RM1a 型遺伝子は冷温耐性に対しては中立的なのだが、もしこの RM1a 型遺伝子をもつ稲が朝鮮半島から渡ってきたものなら、冷温耐性の素質を持っていた可能性が高く、近世になってもしばしば冷害に苦しむというようなことは起こらなかったはずである。日本列島にきた RM1a 型遺伝子をもつ稲が、RM1b 型遺伝子をもつ稲といっしょに南の長江下流域の方から来たのなら、冷温耐性をあらかじめもたず、東北地方へ北上することになって、上で見たように冷温耐性を獲得するのに長い年月がかかったことが理解できる。日本列島の稲は、論文^(38,39)が述べるシナリオのように、日長時間に反応する遺伝子を日本列島に来てから獲得した、と推定するのが合理的である。

こうして、九州北岸に到来した水稻稲作は、800 年といわず 1000 年近くかけて関東・北陸にまで伝播した、と言った方が適切だろうとわたしは考える。越後の国は、700 年ころ（稲が九州北岸に着いてからおおよそ 1600 年後）、中央政府がまだ蝦夷^{えみし}と呼んでいた人々もいたであろう地域に、最後になって置かれた。関東以北を陸奥^{むつ}の国、越後以北を出羽^{でわ}の国と呼んだが、それは名目的なもので、侵入して領国化する方針を表現したものと言うことができる。

701 年に大宝令を發布し、日本国の国郡制が整ったころには、国郡制の敷かれた関東・北陸越後の国以西は水田稲作を基盤とする社会に移行していた、と見てよいだろう。702 年に遣唐使が派遣された。中国側は、『旧唐書』「列伝東夷」で、「倭国」の条の次の「日本国」の条で、「その国界は東西南北各数千里、・・・、東界・北界に大山があつて限りとなし、山外は則ち毛人の国」と書く。この記述は列島西部の稲がたどりついた気温の限界を表現しているのである。700 年代の日本国を記述する『続日本紀』は、その版図内で水田稲作社会が相当に成熟した段階に進んだことを示している。ただし、その後の歴史を見ると、平安時代にもまだ平野の広い関東に開発途上の状況が残っていたように思われる。

iii. 太陽の道という観念は水稻栽培によって生まれた

ここで、第Ⅰ章で考えた「太陽の道」と水田稲作との関連を明らかにしておくことが有用だろう。日本列島に到来した水田稲作がわりあい順調に定着したのには、栽培のノウハウが伴っていたからだと思われる。稲を育てるには、植えつけをいつごろにするか、稲株が増え・大きく育ち・花を咲かせ・実がつき・実が成熟するという生育段階ごとに田に入れる水の管理などさまざまな対応が必要である。先に、稲が日長時間に応じて開花から実の成熟にいたる過程を調節する機構を遺伝子にもっていることは見たとおりである。稲の遺伝形質に合わせて季節ごとの管理をするには、栽培者の方でも季節の変化を細かく知る必要がある。人は季節の変化を日の出・日の入りの方角と日の傾きを観察して知ることができる。だから、水稻を栽培する共同体にとって日の出・日の入りを観察することが重大事だった、と判る。

このようにして、日の出・日の入りを観察しながら水稻を栽培する生活のなかで太陽の道という観念が生み出された、と考えることができる。太陽の道という観念は稲を栽培する陸で育まれたのだらう。人々が、図Ⅰ.1 に示した沖ノ島への日の入りと沖ノ島からの日の出をはっきり意識にとらえ、長門二見夫婦岩—沖ノ島—神ノ島の東西線をありがたい太陽の道と考えるようになったのは、水稻が九州北岸に伝来したころで、春分夏至秋分冬至の知識が明確になってから、と推測される。春分・夏至・秋分は稲の生育の時期を区切る節目だが、冬至も一年の始まりを告げる重要な日として尊重することは世界中でおきた。

二至二分の日に水稻栽培生活の節目として祭事を取りおこなうことは、人性にふさわしいことであった。祭政一致の日本・琉球列島で男性王と王家の巫女の行なった祭事が、太陽崇拜であったことは明らかである（ここにはアニミズムとシャーマニズムの混濁がある。祭事を主宰する男性王は巫覡ふげきでもあり、王家の巫女はのちの斎宮や聞え大君である）。『三国志』

の記述する倭国王卑弥呼は王と巫女を兼ねたが、そこに書かれた「鬼道」というのが「太陽の道」崇拝の儀礼であったことは、ここまでの考察から明らかである。そして、祭事は太陽崇拝のためだから、太陽をおさめとるのに鏡が用いられたと推定できる。九州北部の弥生遺跡で大量の鏡の出土することが納得できる。

補足すれば、第Ⅰ章第Ⅳ節で、新羅で初めての女性王である善徳女王が、瞻星台^{せんせいだい}を築きそこを基点に→王宮→狼山へと続く冬至の太陽の道を明示するように、自らの墓を狼山の頂上に造らせたことを見た。新羅でも王家の女性が太陽崇拝の巫女の役割を担っていたことをうかがわせる。

ところで、『三国志』『魏書東夷伝』の註が史書『魏略』を引いて「その俗、正歳四節を知らず、但^{ただ}春耕・秋収を計りて年紀と為す」と書いている。この文は、「中国式の1年の数え方を知らず、春耕と秋収によって年を（二度）数えている」と言っているのだろう。四季を知らないというのはもちろん誤解で、日の出を観察し太陽の道を崇拝していた倭人はよく知っていたはずである。『魏略』の語句から、前著では1年を春分-夏至-秋分と秋分-冬至-春分と二つに分けたと考えたけれども、冬至-春分-夏至と夏至-秋分-冬至とに分けたとたした方がよいかもしれない。今でも日本で盆と正月の二度を1年の節目とする習慣に適合するのはどちらだろうか。『三国志』はその註より前のところに「倭人の寿命があるいは百年あるいは八九十年」と書いて不思議がっているが、古田武彦⁽⁴⁰⁾が、『記・紀』の記述で倭人の年齢が100歳を超えたりするのも太陽暦の1年を2倍に数えたからだろうと見解を述べている。本書の「太陽の道」の観点はそれに合理的な説明を与える。

参考文献

- (1) 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.
- (2) 小川光三『大和の原像—知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.
- (3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.
- (4) 杉本智彦『カシミール 3D GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.
- (5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.
- (6) 小林健彦「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号,
2014 年.
- (7) 服部英二『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.
- (8) 谷川修 <http://hakkoan.net/>蝶の雑記帳, 「85 ボロブドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.
- (9) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.
- (10) 倉田のり, 久保貴彦 <http://first.lifesciencedb.jp/archives/> 6065, 2012.
- (11) 井澤毅「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号, 2017 年.
- (12) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.
- (13) 谷川修 <http://hakkoan.net/>蝶の雑記帳, 「38 鶺鴒と稲作の伝来」, 「38b 稲作と鶺鴒をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.
- (14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか 気候地理学的な推論』, 白江庵書房, 2022 年.
- (15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」, 「イネの起源 2」, 2018 年.
- (16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.
- (17) Wikipedia「海水準変動」, <https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動>
- (18) 近藤純正「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.
- (19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937年.

考え方だけの孫引き。

- (20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
- (21) <https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分>
- (22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
- (23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念論文集 1, 2016 年.
- (24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
- (25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
- (26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」,
(日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
- (27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
- (28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
- (29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
- (30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
- (31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
- (32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
- (33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
- (34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
- (35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告,
巻11 4号, 1987年.
- (36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, [https://www.jstage. go.jp/ article](https://www.jstage.go.jp/article).

- (37) 「土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」ホームページ.
- (38) T. Izawa Reloading DNA History in Rice Domestication, Plant and Cell Physiology, pcac073, 03 June, 2022年.
- (39) 井澤毅 「イネが光周性花芽形成のモデルって本当ですか?」, 時間生物学 Vol. 25, No. 1, 2019 年.
- (40) 古田武彦 『邪馬台国はなかった』, 朝日新聞社, 1971年.

2024 年 8 月立秋

海蝶 谷川修

